

神戸の枕詞「山、海へ行く」を初めて唱えたのは、平清盛らしい。神戸港の前身、大輪田泊(兵庫津)は、水深があり天然の良港であったが、東南の大風に弱く、朝夕の逆波も激しかった。承安3(1117)年、清盛は私財を投じて「経の島」の建設を始める。廢船に仏教教典の一切経を墨書した石を積み、そのまま沈めるといふ現代の

平清盛の功績

野元 正



のもと・ただし 作家。造園家。元神戸市職員。昭和20年、東京都生まれ。京大農学部卒。平成6年、『氷の箱』で第1回神戸ナビール文学賞佳作賞、21年『鉛色の窓』で第3回神戸エルマール文学賞などを受賞。

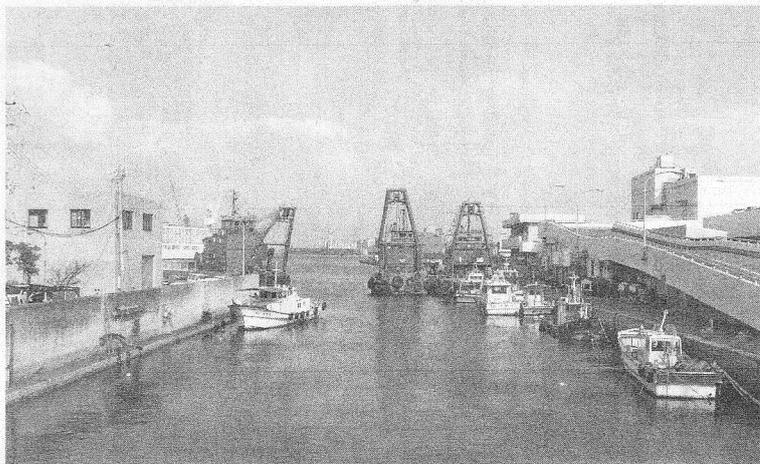
幽閉など悪役として描かれていることが多い。しかし清盛は、育ての親である伊勢平氏の棟梁・平忠盛の背中を見て育った。忠盛は、外国貿易の窓口である太宰府の批判を巧みにかわしながら、独自の海外貿易で財をなした。その影響で清盛の目は、いつも海の彼方の世界に向けられていた。当時、廟堂の貴族たちは、風流に酔い、荘園からの搾取に安住していた。それに比べて清盛の海外貿易立国論は新鮮であり、現代でも十分通用する。

海から築いた国家の礎

工法にも通じる工事だ。『西撰大観』によると、埋め立ての土は、JR兵庫駅の北側「羽坂通」あたりにあった「塩樋山」を切り崩して用いたとある。人力が頼みの平安時代に一山を取り崩して海を埋め立てるといふ発想はすごい。しかも私財で行ったことも驚きだ。

宋国との文物の交流は結果として国家の基盤と民政を安定させ、末代への至宝となる、と清盛が考えていたことは諸資料から読み取れる。そして清盛のこの熱い思いが、今日の神戸港の礎となったことは間違いない。

諸説あるが、白河法皇の落胤説が有力な清盛は、異例すくめの昇進の妬みか、勝者の文学である『平家物語』のせい、後白河法皇の



清盛は築港工事以前の仁安3(1168)年に、安芸の厳島神社の大増築を完成した。これは単なる神社の造営ではなく、港の整備だといわれているし、筆者は瀬戸内海進入の関所の意味合いもあったのではないかと思っている。このことは、嘉応2(1170)年、白村江の戦いの敗戦(天智2(663)年)以来、禁忌とされていた外国船の瀬戸内海進入を許可し、福原で後白河法皇が宋使を引見することに繋がる。

とここで清盛は養和元(1118)年逝去したが、遺骸は京都・六道珍皇寺で荼毘にふされ、経の

平安時代に清盛によって整備され、鎌倉時代の改修で当時、国内第一の港となった「兵庫津」

神戸市兵庫区

島に納められたというが、その墓所は定かでない。

しかし、高橋昌明氏の『平清盛 福原の夢』によると、『吾妻鏡』に出てくる播磨国山田(現・垂水区西舞子の山田川周辺)の法華堂説にとても魅力を感じる。海への限らない情熱を持つ清盛の墓所としてふさわしいからだ。山田は平家領の荘園で清盛の別邸があった所だ。

『高倉院厳島御幸記』には高倉上皇が厳島へ行く途中に立ち寄った記録や庭園の記述もある。その記述から、庭園は淡路島を望む明石海峡を借景にしていると思われる。海を借景できる高台か、兵庫津の「和田神社」のように山田川河口辺りで船泊と一体となった邸宅庭園も想定できる。この地は「きつね塚古墳」や「五色塚古墳」など古代から美しい海の見える墳墓の地に近い。清盛は神戸の何処かで今も静かに眠っている。知りた気持ちもあるが、そっと永遠の眠りを妨げないように願う気持ちも強い。

神戸が誇るモダンイズム詩人で長く兵庫津に住んでいた竹中郁は、『私のびっくり箱』の「八百年」で、「母が「今日は清盛さんの日」やよって、おそなえせんらん」と花や白餅を供えていた」と記し、陰膳するつもりで兵庫の恩人に感謝と尊敬をささげ、ひそかに清盛の人格と識見に頭を下げていたのだともいう。筆者も、一過性でなく、兵庫人として清盛の業績を忘れないように、今を生きたいと思う。